

優良農家の紹介

親子で栗の付加価値販売（冷蔵栗で甘さも倍増）

三田市の栗の大規模栽培農家である、小仲教示さん（農業経営士）は祖父の経営していた林業地を開墾し、3 haの栗と1 haの梅を栽培し1961年に就農した。

1972年に大川瀬ダムの建設により果樹園の移転を余儀なくされ、住居の移転とともに本格的に大規模果樹園経営を開始した。1996年に後継者の正章氏が就農し、現在、教示さん、妻の知加代さん、後継者の正章さん、妻の由美さんの4人で栗5.3ha、梅2.1haを栽培している。

1. 品種、鮮度を考えた収穫体系の確立

計画的な品種（9品種）の植栽により品種別収穫を行い、栗の品質のバラツキを極力少なくしている。さらに、イガごと収穫することにより園内の病害虫密度の低下を図るとともに、収穫作業の効率化を図っている。

また、1987年から兵庫方式の低樹高栽培を導入し、収量安定、品質のバラツキを抑えるとともに、剪定時の安全と作業の効率化を図っている。



湖梅園の低樹高栗園

2. 付加価値を高めた販売の実践

販売出荷は品種別出荷の徹底と通常より一回り大きい規格（選別網を格子状にしている）による選別を行っている。

さらに、12月まで出荷対応できるよう冷蔵コンテナを配備し、予冷や貯蔵による品質の向上と出荷調整、味のバラツキ防止を行っている。特に、栗の場合0℃前後で貯蔵すると果実成分のデンプンが糖に分解され、30～40日後には糖度が約3倍になる。この食味向上技術を活用し、冷蔵栗の品質を高めているとともに、甘い栗を消費者に提供している。また、直売所の出荷箱も工夫し、9月の高温時は箱内での蒸れを防止するため、プラスチック籠を利用し、10月以降は通常の箱を使用しているが、独自性をだすため、師事する画家のデザインも入れている。

3. その他

後継者の正章さんはホームページを活用し「湖梅園」(<http://www.kobaien.com/>)のPRや販売を2001年より取り組んでいる。

小田芳三（三田農業改良普及センター）



独自考案した栗選別機

ひょうごの農林水産技術 No.142

平成17年11月1日（隔月刊） 兵庫県立農林水産技術総合センター（0790）47-2400
1部250円（申込先・県立農林水産技術総合センター）